

た ま ふ く

法人だより



施設長を1年経験して

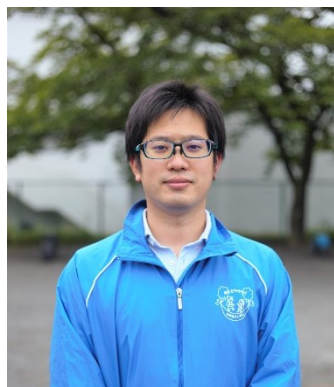
貝取学童クラブ 中村 輝

今回「たまふく」の原稿依頼を受けて、前々から学童クラブについて話す機会があれば、ぜひ記事を書いてみたいと思っていました。ただ今回は施設長目線で、学童クラブの日々の様子を少しでも皆さんにお伝えできれば良いかなと思います。

私は2011年4月に多摩福祉会に入職しました。そこから10年間に、退職された施設長の方々、現取小学童クラブ中村統括施設長、現永山小学童クラブ和田施設長とそれぞれ学童クラブの施設長になられる所を傍で見ながら働いてきました。それぞれ苦悩されたところも多々あったかと思いますが、実際に自分自身が同じ立場となった時に、施設長の皆さんが奮闘してこられた事、様々

な苦労をされていた事を改めて思うと共に、一つ一つ身に染みて感じています。

昨年度からの新型コロナウイルス感染症の流行により、例年にはない対応も多く、小学校が休校となり、分散登校があったり、感染症対策についても職員間で何度も検討して施設内のレイアウトを変えたり、流れを見直したりしてきました。子どもたちにもその都度説明を行い、消毒については保護者会で伝えていきながら、子どもたち、保護者の皆



中村 輝 施設長
(学童クラブでは「あつきー」と呼ばれています)

連絡先

〒155-0031
東京都世田谷区北沢
2-36-9-4F
社会福祉法人多摩福祉会
法人事務局
◆Tel.03-6804-8345
◆Fax.03-6804-8347
◆Mail:
tamafukushikai@gmail.com

今号の目次

- 1P 貝取学童クラブ
「施設長を1年経験して」
- 2P 向山保育園
「年長児保育士環境設定」
- 3P 法人本部
「多摩福祉会で仕事をするということ」
- 4～5P 永山学童クラブ
「学童クラブについて」
- 6P こぐま保育園
「2年ぶりの受け入れ期」
- 7P 砧保育園
「今 考えていること」
- 8P 上北沢こぐま保育園
「今年度の受入期を終えて」

様にもご理解とご協力をしていただいた1年となりました。

法人内外での会議にリモートで参加する事も増え、事務室で行っていると、「あつきー何してるの？」と最初は子どもたちも物珍しい様子で事務室を覗いていたのですが、最近子どもたちも慣れてきたのか「○貸してー…あ、会議中か」という反応も増えてきて、以前なら「おいおいよー何に使うの」とそこから話を広げるために出ていったのですが、その気持ちを抑えながら会議に参加しています。会議が終わった頃には子どもたちも帰る時間になり、「あ！あつきーいたんだー。じゃあねー」というような感じで接する事もなく帰って行く子もいます。それが切なくも感じるのですが、現場から一歩下がって職員の皆さんに任せ



貝取学童クラブ

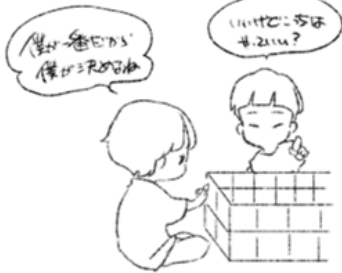
る事も大事だなと思います。一方であまり離れ過ぎると子どもたちの事がわからなくなってしまうのと、事務作業をしないといけない等々：色々葛藤しつつ、結局なんだかんだ育成に入っている日々を送らせてもらっています。

と、振り返りながら書いていて、改めて自身が「学童クラブが好きなんだなあ」と思いました。

向山保育園 年長児保育室 環境設定

コーナーを広く明確に分けたことでそれぞれのコーナーで熱中、集中して遊び込める姿が見られるようになりました。また、子ども同士でのやりとりが増え、喧嘩をする時もありますが大人の仲介がなくても、それぞれが言葉を使ってコミュニケーションを取る姿が多く見られるようになってきた。

構築コーナー



役割分担をしながら遊びを作り上げる事も多く、考えが一致しないことや、役割分担で揉める事もあります。そのような場面でもお互いが納得できるような解決方法を自分達で考える姿も見られるようになってきました。

ピタゴラス・アイクリップ
プラスプラス・積み木
線路・ワーミー



美術コーナー

塗り絵・スケッチブック
折り紙・工作・粘土



個人持ちのものを取り入れる事で物の管理、使い方などのルールを少しずつ意識できるようにしていけるようにしています。
“自分の”スケッチブックや色鉛筆、引き出しにはとても喜んでいました。自分のものがあるという安心感もある様です。

ゲームコーナー

あやとり・すごろく
トランプ・UNO
オセロ・パズル
キャップゲーム



お互いの考えているルールの共有ができるようになってきていることもあり、数人での遊びが充実してきています。数や文字などに対しても興味を持ち始め、文字などを使った言葉集めなどの遊びも楽しんでいきます。



個別スペース

おままごとコーナー

コーナー自体を少し広めにとり、ローソファを置いても広々使えるようにした事で大人数になってもくつろいで座りながらままごとや、絵本、劇ごっこなどをして遊んでいます。



ままごとセット
ぬいぐるみ・絵本

多摩福祉会で

仕事をするとということ

法人事務局 伊藤 陽平

私は2020年3月、多摩福祉会に入職し、現在法人事務局で業務を行っています。法人全体の労務管理についてのこと、学童クラブの事務（給与、会計ほか）などを中心に仕事をしています。

大学を卒業して就職してから、仕事に関しては「自分に何ができるのか」の悩みと問いの連続でした。そうした中で、大学時代にゼミで学んだ労働法を切り口に、「なんとかこれ仕事を繋げられないか」との思いから「社労士（社会保険労務士）」の資格を取得しました。社労士を取得してからは、社労士事務所などを経験して、現在に至ります。

複数の会社、法人を経験していえることは、世の中にはいろいろな「世界」があるということです。ある会社、業界での常識は、別の世界から見れば非常識になります。私が経験したある会社では、仕事をしているのに、実際には残業申請はあまりできませんでした。上司は申請せよと言いますが、皆周りの顔色を伺って、

申請しようとはしませんでした。それが当時のその業界の常識だったのです。

現在はコンプライアンス（法令遵守）も重視するようになりましたので、状況は変わったとは思いますが、私たちが常識だと思っていることが通用しないこともあるのです。こうした経験も、社労士、労務管理に関心をもった一因ではあります。労務管理は、ヒトに関することです、ほんとうに難しいです。

ここからは多摩福祉会のお話になりますが、法人の労働条件や労働環境は、私が経験、見聞きした業界のなかでもかなりの水準だと思います。一概には言えないとは思いますが、少なくとも法人として「労働環境を



事務室の様子



理事会や各種会議は、前面のディスプレイで ZOOM を使用し、ここでを行っています。

良くしていこう」という方向に向かって努力を続けていることが、特筆すべきことだと思います。

入職とほぼ同時期にコロナ禍になりましたが、こうした中でも、一定の労働環境を維持できているのは、法人の歴史、理念、そして職員の努力のおかげである、と感じています。

私が法人で仕事を続けていく上でやるべきことは、職員の皆さんが「普段どおりに、普通に」仕事を行えるようにサポートすること、と思っています。普通に仕事ができるよう、職員個人の努力も大事ですが、周りから制度面、環境面を整えることも重要です。その「整える」作業の一端を担うことができれば、と思っています。これまでの経験を活かしつつ、日々精進してまいります。

職員募集



お知り合いをご紹介ください!!

多摩福祉会では、一緒に働いてくださる保育士さんを募集しています。オンラインでの採用試験も実施していますので遠方からの受験も可能です。ぜひお知り合いの方をご紹介ください!!

詳しくはお気軽に
多摩福祉会法人事務局 Tel.03-6804-8345 (岡田)

保育園の先生からのQ&A

Q1,コロナ禍で大変なことや工夫したことは？

A, 急に学校が休校になったり、分散登校が始まったりしたため職員の体制がとりづらかったことが大変でした。目に見えないという恐ろしさやどういった時に罹患するのがわからないため、「どうしたらいいのか？」と毎日悩みながら育成に携わっていました。

そんな中でも子どもたちの行事は昨年コロナ禍で内容を変更したことが多々ありました。昨年の前期は新型コロナウイルスの現状がよくわかっていないこともあって、密を避けるため中止せざるを得ないものもありましたが、「おみせやさん」や「お楽しみ会」、「3年生お別れ遠足」「進級お祝い会」なども大きな行事は形を変えて実施することができました。行事の目的を見直し、感染拡大防止のために今までやっていたことを削ぎ落として、目的を見失わないように職員や子どもたちの意見を聞き内容を工夫して実施してきました。今年も同様に、「コロナ禍を理由にできない」ではなく、「コロナ禍でもできる」ようにしていきたいと思っています。

Q2,学童のやりがいがあってなんですか？

A, 放課後はたった3~4時間（長期休みは1日ですが）しか子どもたちがいないにも関わらず、けんかやもめごとが勃発して毎日嵐のようです（笑）でも3~4年間、学童クラブでの生活や遊びを通して心も体もいっぱい大きくなって卒クラブしていく、子どもたちの人格形成のとても大切な時の「素」の姿と関って、共に過ごすことのできるこの仕事がとても大好きです。また、永山学童クラブは地域の公園で遊ぶことが多いので、卒クラブした後も地域でその子を見かけて声をかけると「おーさとっち！元気？」と気軽に挨拶してくれる子もいて、その後の子どもの成長を見て感じられるのもいいところだと思っています。

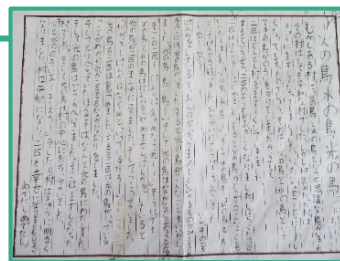
Q3,小学生ってこんなにすごい！って思えるのは？

A, 3・4年生で卒クラブする時には「自分で考えて行動する力」を身につけますが、ここでは卒クラブする前の行事「進級お祝い会」で3・4年生の女の子たちが自分たちで考えて披露してくれたペープサートの台本が中々の大作だったので紹介したいと思います。このペープサートを考えてくれた中心人物に共通するのは、1年生の時から学童クラブにいる時間の大半本を読んでいることが多く、あまり自分の気持ちを表現しない、目立たない子たちでしたが3・4年生になってから自分のことをイキイキと表現するのが本当に上手になって、その能力が花開いた子たちでした。ナレーターや役の配分も自分たちで考えて行ったこの劇はみんなにも好評で、劇が終わった時に3・4年生たちが作った鳥や絵は下級生たちで取り合いになっていました。学童クラブでは本ばかり読んでいてそれほど周りの子と関わりがなかったようにみえた子どもたちが、学童クラブの生活（遊び）や行事でみんなと関わっているうちに、立派な台本を作って、子どもたちの前で発表できる力をつけていたというのは小学生ってすごい！と思えるようなことでした。永山学童クラブにビデオを撮ってあるので、その様子に興味のある方がいらっしゃいましたら、学童クラブにお声がけください。

学童クラブの子どもたちが作ったお話

「火の鳥 水の鳥 光の鳥」のはじまりはじまり～

むかしむかしある村に火の鳥と水の鳥という不思議な鳥がいました。その村はとても平和な村でした。しかし何年かたった村はきゅうに貧しくなっていました。いったいなぜこんなに貧しくなったのでしょうか。それは、火の鳥と水の鳥という敵の鳥がのろいをかけてしまったからです。するととつぜん、二匹のようすがおかしくなりました。しばらくたつと、その村にかくしてあったほうせきを取りあって、二匹はけんかをしはじめました。すると火の鳥がとつぜんこんなことをいきました。「火の鳥、鳥、鳥～」そして水の鳥も「水の鳥、鳥、鳥～」と言ってけんかを続けました。おたがいに攻撃を合いました。～わざ～わざ～、そのときけんかをしていると奥の方からまぶしく光るものがみえました。そこには、光の鳥がいました。すると光の鳥がこんなことをいきました、「光の鳥、鳥、鳥～」そして、光の鳥はなんとこんなことをしゃべり始めました。「その二匹～、けんかはおやめなされ～！」そうやって火の鳥と水の鳥二匹の真中に立ちました。そしてこう言いました。「だからけんかはおやめと、いつているだろう～」「エメラルドライトブレス！！」光の鳥を二匹は見つめました。すると二匹は光の鳥がいつていることがわかったのか二匹とも仲直りをしました。そして取り合っていた宝石はなんと光の鳥に渡しました。そして光の鳥はどこかへ行きました。そこは貧しくなった村でした。そして光の鳥は村の中心に立ち、言いました。「火と水ののろいよ～きえろ～」そしたら村はきゅうに明るくなりました。村は平和になり、二匹も幸せになりましたとき。めでたしめでたし。



《学童クラブの1日の流れと役割》

永山学童クラブ 笠井 智文

○ 1日の流れ ○(※一例です。)



学童クラブ職員の役割

- 遊びや生活、行事など生活全般を通しての成長への援助と働きかけ
- 子どもの健康管理
- 一人一人の子どもの生活の援助
- 家庭との連携（子どもの状況把握、家庭との連絡・相談・面談・保護者会の開催）
- 学童保育に関する事務作業（月次報告、おやつ・おたより・行事計画の作成など）
- 金銭管理（立て替え金処理、給与計算など）
- 市との連絡調整
- 児童館・学校・各関係機関との連携、地域の生活環境作
- 育成に関する自己研鑽のための学習・研修

（参考 日本の学童ほいく）



“進級する”が子どもにとってぐんっと成長するきっかけになる。

2年ぶりの受け入れ期

こぐま保育園 岩崎 玲以

昨年度、政府からの緊急事態宣言を受け「保育縮小」となり、迎えることができなかった受け入れ期。今年度は昨年度に引きつづき、感染症対策として保育室に父母が入らない送迎方法や、受け入れ時の子どもたちの手指消毒の徹底等を行いながら、受け入れ期を迎えることができました。いつもすぐそばで、共に感じていた進級の喜び。

昨年度感じるものが少なかった分、今年の受け入れ期で見られた子どもたちの受け入れ期ならではの姿が印象的でした。そして改めて『進級(大きくなること)』が子どもたちにとって大きな喜びであると感じることができました。そんなかわいらしい子どもたちの姿を紹介しましょう。

「なんでまだすぶすぶ(すくすく/2歳児)さんなの?!」

Aくんは今年に入ってから誰よりも大きくなることを楽しみにしていました。毎日のようになぜなぜ(3歳児)になることを楽しみに

にしており、この言葉を職員にぶつけていました。そして待ちに待った4月。幼児となり初めての課業、美術へ参加しました。「Aくんおにいさんだもんね。おつきくなつたからできるんだよね。」と喜びに溢れ、張り切ってこいのぼり製作を行う姿がなんともかわいかったです。

また、すくすく(2歳児)となったBくんは、大人の膝に小さい子が座っているのを見ると顔を真っ赤にして泣き怒り。小さい子を押しつけて自分が膝を独り占め。着脱でも「(先生)やって!」と常に甘えモード…という姿も見られました。けれど4月後半になると、「赤ちゃん、ここだよ」と食事の椅子までエスコートしてくれたり、「オムツ替えるよ」と担任のところまで小さい子を連れてきてくれたり(自分もおむつ替えていないのですが…)と小さい子をお世話しようとする姿が見られるようになりました。



そしてずっと憧れていたAくん(5歳児)となった子どもたちは、給食当番やお昼寝のトントン、夕方の入室など力を発揮してくれています。ある時、2歳児のCちゃんトイレへ行くも「でぢな(できな)い」の声。他児の寝かしつけですぐに向かえない職員を見て、「せんせい、いまDがいくから」、「Cちゃんまって」と声をかけてくれました。「いませんせいEくんねかせているからね、Dでいい?」と優しく声をかけ、オムツ替えからふとんに寝かせ、タオルをかけるまでを行ってくれました。大人から声をかけるのではなく、状況を察して行動してくれた姿に感動。そして後日Dちゃんに「なんでそんなに優しいの?と聞く」と「だってD、Fちゃんみたいになりたいから」と一言。Fちゃんは昨年度卒園した1つ年上の優しいお姉さん。自分が優しくしてもらったこと、小さい子へ優しくかった大きい子の姿を、今Dちゃんが

小さい子へ思いを寄せ接してくれている、異年齢の繋がり、温かさを改めて感じた受け入れ期となりました。

『1つ大きくなること』でできることが増えて喜んだり、まだまだ甘えたくて葛藤したり、新しい小さい子に嫉妬したり…いろいろな思いであふれる受け入れ期。昨年度は家庭での時間が多く、久しぶりに会えた時には大きく成長していた子どもたち。今年はずっくと子どもたちの言葉を聞きながら、思いを寄せ合い、受け止め、共感していくことができた受け入れ期。

子どもの成長する喜びを共に感じ、受け入れ期が子どもたちにとって大きな自信を与えてくれるというのを改めて知る機会となりました。



今 考えていること

砧保育園園長 西田健太

はじめましての方も多いかと思いますので、まずは簡単な自己紹介から。私は異年齢保育に惹かれて2004年度よりこぐま保育園に入職し、15年間こぐまで働いた後に2019年度より砧保育園へ異動となり、2020年度より園長をさせていただいています。分からないことが多過ぎて、砧保育園の職員はもちろん、法人職員の皆様に支えられて何とかこなしているというのが正直なところです。今までは大ベテラン園長の傘の下で守られていたのだなあとしみじみ感謝しつつ、自分もそのような存在になれるよう少しずつでも着実に成長していければと歩みを進めています。どうぞよろしくお願いたします。

さて、話は変わりますが、最近よく「子どもの人権」について考えます。日本ではまだまだ「子どもは未熟な存在で、大人が決めたことをその通りに行わないといけない。そこからみ出す子どもは問題だ」という捉え方が一般的なのではないか

と感じています。ある意味、これは大人社会でも同様の価値観であるかもしれません。「こうあるべき」という枠があり、違いを認め合うことがなかなか難しい状況もあるのではないのでしょうか。多様性を認め合う

には、まずは自分自身が認められているという「心理的安全」が守られることが大切だと考えています。この視点は「評価」ということと密接に関わっています。大人が決めた評価基準に照らして子どもを評価することで、子どもは評価を上げようと大人の言う通りがんばるという構造が生まれます。もし評価する側にとってマイナスなことをしてしまえば…。つまり、このシステム自体が大人が子どもを管理するものであり、人権を尊重する立場から考えられたものではないのではないかと感じていきます。保育士が子どもに「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿（保育所保育指針より）」を望む時、「こうあるべき」の幅がより狭くなってしまうよう意識していく必要があるのではないのでしょうか。保育業界では「みんながつてみんないい」というフレーズをよく耳にしますが、その理念を社会



全体に広げていくためにも、未来の社会を築いていく主人公である子ども達自身がそう実感できる生活を、まずは保育園内から築いていきたいと考えています。また、幼い頃から肌間隔で「みんな違って当たり前」という価値観が育つという視点からも、法人で大切にしている異年齢保育の重要性を確信しているところで

す。また、労働組合員だった頃、「子どもは自分で声を上げられない。保育従事者が代弁することが大切」であると教わりました。社会の動きが保護者に影響し、それが子ども達にも影響するということを強く意識するようになりました。子どもについて考えることは、社会について考えることだと繋げてイメージするようにしています。「子どもの人権」を考える上で欠かせない大きな視点です。

最後に、保育を学ぶことは本当に

幅広く、最終的には「人間」について学ぶことに行きつくのだと思っています。人類史や生物学的視点、心理学や脳科学、学校教育、社会情勢、環境問題等々…。幅も奥も広過ぎて学びが追いつきませんが、その分興味も尽きません。考えること、そしてそれを話し合うことが楽しいです。人が生きていく上で大切なことは何か。コロナ禍ではより顕著となつていますが、現代社会では様々な問題が表出し、応急処置的な対策で右往左往して疲れてしまうということが多くなつてしまっている気がします。もつと根源的な、シンブルなところに大切なことが埋もれているのではないかと、俯瞰的に物事を捉えながらこれから先を見通していければと、今は考えています。



西田 健太 園長

今年度の

受け入れ期を終えて

上北沢こぐま保育園 茂木 常禎

昨年度の受け入れ期は、保護者の方の園内への立ち入りを止めていた時期でもあったので、新入園児の子どもたちも受け入れ保育初日から母子分離をしてのスタートでした。本来なら初日は安心できる人と一緒に新しい環境に慣れていくことができればベストですが、昨年はそれができず、保護者の方々も色々な不安を抱えていたのではないかと思います。そんな中でも各家庭に協力してもらい、受け入れ保育をずらしてもらえたことで、慣れていくのに差はありました。少しづつ新しい環境に慣れ、担当の先生とも日を重ねるごとに関係を築いていくことができました。そんな矢先、緊急事態宣言が発令されて応急保育に移り、私たちも経験した事のないような生活を過ごしていた時期でした。

コロナ禍2年目、今年もコロナの影響で仕事の復帰を伸ばした家庭や

在宅勤務の家庭がありました。在宅でお仕事をしながらお子さんと過ごすのは大変なことも多かったと思いますが、昨年同様に保護者の方々の協力のもと、ゆったりとしたペースで受け入れ保育を進めていく事ができました。保護者の方の園内への立ち入りが全く無かった昨年と違う点は、状況を見ながら保護者の方も園内に入り、一緒に受け入れ保育を行えた事でした。

今まで当たり前にやってきた受け入れ保育が、いかに子どもたちにとって安心して保育園での生活をはじめめる為に大切であったかを実感しました。保護者の方もはじめての生活に不安も多い中で、保育園の雰囲気やクラスの大人と少しの時間でも一

緒に過ごせることは、これから保護者の方とも関係を作っていく中で本当に重要だと感じました。子どもたちにとっても、保護者にとっても、私たちにとっても凄く大きかったのではないかと思います。

今年度の子どもたちは、このコロナ禍の中で生まれ「これまであまり家族以外の人と関わりを持つことができなかった。」と話す保護者の方もいました。

子どもたちと家族以外の身近な大人との信頼感の築きは、人と関わる為の第一歩だと思います。これから子どもたちが周囲の人や物への興味関心が広がっていくのは、信頼できる大人がいてくれるからこそ向かっていける力だと思います。ですから、その力を付けられるように、担任の先生たちもいろいろな事を考えながら関わってくれています。受け入れから1対1の関わりを基本にして、

もの木のおうちの大人とも愛着関係を築いていき、周囲の環境や友達にも興味を広げていっています。



コロナ禍2年目、昨年度1年間で今まで自分の中にあつた【普通】という概念がいかに壁になってしまっていたのかを様々な所で感じました。今年度も沢山の壁に当たることもあると思いますが、その時に出来ることや『子どもたちにとって、どうしていつあげられることが良いのか』を職員間で考え合い、子どもたちを真ん中に置いて成長した姿を楽しみに想像しながら過ごしていきたいです。



● 広報委員会 ●
中本 琢也
江藤 龍之介
岩崎 玲以
岡田 織